

地方自治体における「ワクワク感」の必要性と創出要素
—安曇野市職員の実態と期待を踏まえた考察から—

【 要 旨 】

ソーシャル・イノベーション研究科
ソーシャル・イノベーション専攻
2025年3月修了
中嶋 信之

地方自治体に求められる役割は、相次ぐ自然災害の発生、高齢化社会の進展などにより、年々多様化、複雑化している。加えて、生産年齢人口の減少による人手不足が顕在化しつつあり、将来的には現在と同様の行政サービスを提供できなくなる可能性がある。

そうした危機的状況のなか、地方自治体で働く職員の主体性や前向きなマインドを資源として、新たな取り組みや事業改善にチャレンジする動きがみられる。そこで活動する職員は、働く過程に楽しみを見つけ、高いモチベーションを保っている。

筆者は常々、自治体職員が組織をはみ出し、地域のステークホルダーと一緒にワクワクする仕事ができたらどんな楽しい変化が生まれるだろう、と想像する。本稿では、そんな妄想を実現するための第一歩として、働くうえでのポジティブな感情である「ワクワク感」に注目し、その必要性和創出要素について考察した。

研究にあたっては、地方自治体職員がワクワクしながら働くためのきっかけは何か、という問いを設定し、先行研究レビューおよび自治体職員への調査により分析、考察した。

まず、働く場面においてポジティブな感情をもたらす作用について、ワーク・エンゲイジメントやワーク・モチベーションの概念および関連する理論との関係性を整理し、ポジティブな感情がプラスに作用することを確認した。同時に、局面に応じてネガティブな感情とのバランスを取り、使い分ける必要性も示された。

次に、自治体職員がワクワクしながら働くきっかけを明らかにするため、安曇野市職員への調査を行った。調査手法として、実態把握を目的とするアンケート調査と、アンケート結果から抽出された職員へのインタビュー調査を実施した。

アンケート調査では、仕事においてワクワクしたいと考えている職員が9割弱いるものの、実際にワクワク感を体験している職員は4割強であり、希求と充足に大きなギャップがみられた。また、ワクワクする仕事として、「知の深化」および「知の探索」に関連する職務への回答を得たが、「知の探索」領域では職場の同僚の存在がワクワクを感じるきっかけになっていなかった。

インタビュー調査は、アンケート調査結果を踏まえ、「知の探索」領域でワクワク感を体験している職員を対象とした。その結果、職場の同僚を含む「他者との良好な関係性」の構築がワクワク感を生み出すうえで重要であるとの見解を得た。

2つの調査からは、職場の同僚との相互関係性の向上・強化により、「知の探索」領域の職務に対してワクワクを感じる機会が増える、また共感する職員が増える可能性が示された。また、そのほかにも、自己効力感、取り組みが評価される仕組み、実践の場の存在、組織の寛容性が、働くうえでのワクワクを生み出すきっかけとなる可能性を確認した。

そのうえで、自治体職員が地域のステークホルダーとワクワクしながら活動するための初期のステップとして、3つの提言を行った。職員の主体性や好奇心をリソースとする「社会人版部活動」からスモールスタートし、後続する取り組みとして「対話の時間」および「兼業ルール」の導入を提案している。それぞれの取り組みは、継続した活動を経て、活動領域を拡大していくことを想定している。

本稿では、個人のポジティブな感情に注目した。感情は様々な要因の影響を受けるため非常に複雑である。今後、筆者自身の活動を通してさらなる知見を収集したい。